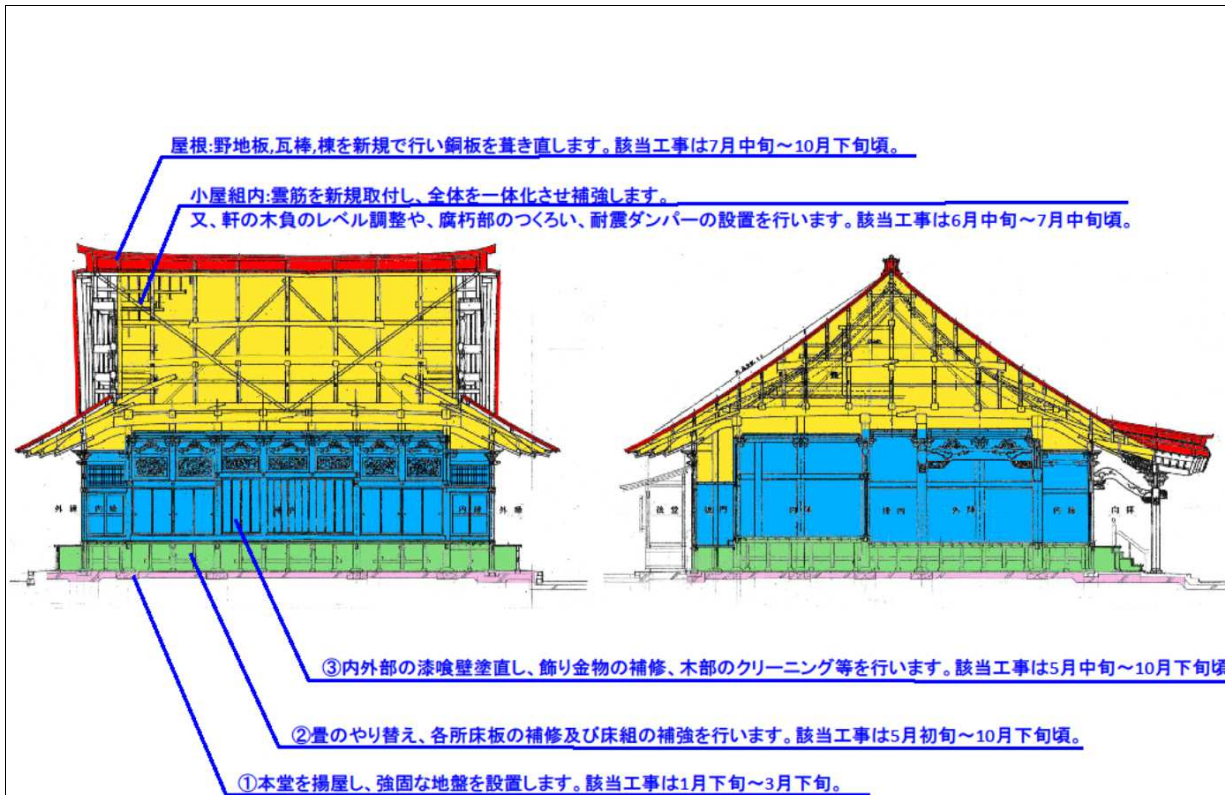


長念寺平成大改修 本堂保存修理工事

建物概要

当本堂は1824年(文政7年)に上棟、1848年(弘化5年)に完成。正面柱間7間(背面は9間)、側面柱間7間の規模で、正面1間に唐破風を付けた向拝を出します。屋根は、もともと急峻な勾配をもつ寄棟造の茅葺で、向拝に瓦を葺いていましたが、1959年(昭和34年)に現在の入母屋造・銅板瓦葺葺に改修されました。軸部や造作材に樺を多用し、内部の柱を建登せ丸柱とし、内外に組物と彫物装飾を用いて仏堂化を進めています。側周りは角柱を用い、軸部に切目長押、内法長押(正面中央間は差鴨居)、飛貫、頭貫(獅子頭付)、台輪で固めています。向拝は組物は三斗組(拳鼻付)、中備に板葦股を置き、軒は二軒殊垂木でした。1959年の改修の際に、三軒にしています。内陣及び左右余間の正面は巻障子や彫刻欄間(現在修復の為撤出中)を金色に仕上げ、飛貫をすべて虹梁形に造り、向拝同様組物は出組、中備に彫物葦股を入れ、内法長押より上野木部に極彩色を施しています。また、内陣及び左右余間の内部は、出組斗拱を組んで格天井に造り、格間の板に彩色画を描いています。内陣と左右余間の装飾を凝らした意匠及び外陣の大虹梁架構による広々とした構成が見所であり、それらの構造や細部意匠は幕末期の特徴を示しています。

工事概要



長念寺平成大改修事業計画完成予想図



保存修理の為の仮設【素屋根】

素屋根とは、工事中の建物を雨から保護するためのもので、完成したときには取り払う仮の屋根です。鉄骨のビームを横に流して屋根面に建地をつかない工法など様々な種類の素屋根があります。今回は廻りのスペースの条件から、パイプ骨組みでの工法を選定しています。



↑単管パイプで屋根面の骨組みをしています。

↑屋根材を張り、建物をすっぽり覆います。